

月刊
JMITU

つながる輝き

新型コロナ対応版



コロナ禍だから つな がる 輝き

12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2020年発行

No.432

経営者に痛みがあるのか？

経営の責任は報酬減額、株主配当金減額 従業員は希望退職応じれば失業

東京商工リサーチは12月9日、2020年上場企業、早期・希望退職募集状況を公開した。今月の7日までに上場企業の早期・希望退職者募集が90社に達し、募集人数は、判明分で約1万8千人に達しているということだ。

11月の全国完全失業率は2.9%で、完全失業者数は195万人、総務省は「新型コロナウイルスの感染の再拡大が続いており、これまでの悪化が底を打ったとは言えない」としています。

以下社長の構造改革についての発言、私は常々「企業は人こそが財産」と話してきました。今回、希望退職制度の実施に踏

み切ることはグループトップとして苦渋の決断でありました。また、これまでセガサミーグループの社員として尽力してくれた皆さんへこのような選択を迫る措置をとることは断腸の思いであり大変申し訳ない。今回、社外転身を決断される方については、次のキャリアに進むためのサポートを最後まで行います。

断腸の思い辞書で調べると「はらわたがちぎれるほど、悲しくつらい思い。」そんな思いをしたら2度としたくないと思うのが普通ですが幾度となくこの会社の経営者は行います。しかも今回はそこまで経営が厳しいわけではありません。

また、次のキャリアに進む為のサポートをするといっているが、お金を払って再就職会社に任せるだけ、本来であれば、その社員のキャリアやスキルに一番詳しいのは会社です。

断腸の思いというのであれば、650名全員の再就職先までサポートするべきです。

それが出来ないのであれば安易に希望退職をやるべきではありません。

一方、会社は希望だからと言いますが「今の仕事や職場がなくなる、他社に向向もありえる」と幾度となく上司から面談で言われれば、これこそ断腸の思いで本来の希望ではなく、仕方なく希望退職を受けた人達も居るのではないのでしょうか。

希望退職した方たちは、すぐに就職が決まればよいが、決まらなかつたら失業保険の申請、年金の切り替え、健康保険の切

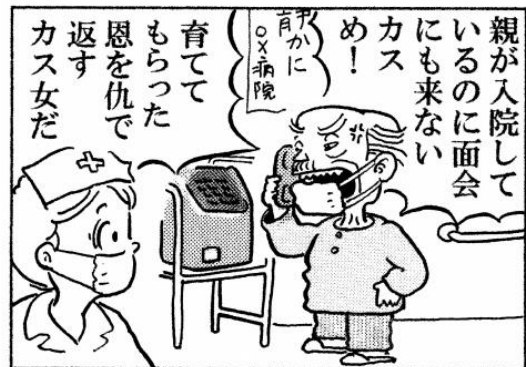
り替え、失業保険が支給されているまでは何とかこれら保険代も払えますが、失業保険が切れ無収入になった時これらの保険代支払いが厳しくなります。こうなると誰が痛みを痛感するかは一目瞭然です。

社員だけではありません。今まで社員と同じくらい、そこで働く非正規の派遣社員やパート・アルバイトも今回の構造改革で雇い止めされた方もいます。

経営者には労働者の暮らしと雇用を守る責任があります。私たち労働組合は、会社にそれだけ不満を言うのであれば、「もっといい会社に行けばいいじゃないですか」と言われませんが、今までもこれからも会社を良くする為に、会社へ要求を出しています。長年ここで働く労働者の要求を出すことで、今の会社にまでなっています。

4こま漫画

川崎よしき



仙洞田一彦

面談すると、部長から会議室に呼び出された。十人くらいの会議が出来る部屋で、囲んでいるスチールの仕切り板は、すべてが灰色。窓がなくて閉鎖的な印象だ。三人掛けの細長いテーブルが四つ、四角く「ロ」の字に置かれ、各テーブルには、三つではなくひとつずつ椅子が置かれている。除かれた八個の椅子は、部屋の片隅に重ねて置いてある。密を避けるために、三人掛けのところを一つにしてある。どこに座れとも指定されていないので、出入口が一番近いところに腰掛けていた。

部長がせかせかと、いつもの足取りで入って来た。毎日見ている顔だから、特にどうということはない。話される用件も、退職強要の面談と知っている。「退職強要」というのは、私の主観でそう言っている。無論、部長は、そういう言葉は使わない。いま会社は大量の人減らしを行おうとし、個人面談をして、それぞれが置かれている状況を把握したいというのだ。「把握」などと、あらたまって言われると、なにを今さらよそよそしいと、なんだか恥ずかしい気がする。また「把握」してどうするのだ。クビの理由作りか。

外は寒いけど、建物の中は暖房が効いていて暖かい。ワ

イシャツに蝶ネクタイ姿。長いネクタイを見慣れていると、夜の蝶ネクタイは新鮮だ。夜の繁華街では見かけるが。顔は長くて間延びした感じもいつもの通り。背は高く、いくらか猫背。髪はすっかり白い。部長は部屋に入ってくると、私の真向かいの席に腰掛けた。部長のマスクの片隅には、何か絵が書いてあるようだが、小さいのでよく分からない。私も白いマスクをしている。蝶ネクタイと言いつ、マスクの模様と言いつ、ちよつと普通と違う雰囲気を持っている部長だ。ときどき意味不明のことを言うかと思えば、すごい！と思わず感嘆させるようなことも言う。

「ご承知のように、部員、全員に面談を行っています。だから、特にあなただけがどうのということではありません。ざつくばらんに、感じたことなどを、遠慮なく話してください。私もあなたのことをよく知りたいし」

部長は、よそ行きの、やや高い声をし、普段の言葉よりも丁寧に言った。仕事のある日は、毎日顔を合わせているし、それも数年、部長が部長になる前からなら二十年になる。それだけ顔を合わせているのに、私のことを知らないというのも変だ、というより馬鹿だ。いや馬鹿など言うてはいけない。好き嫌いを率直にいうと部長は、私の好きな人の方に属する。ざつくばらんにしゃべれといったって、

別に話すことはない。だから、私は先回りして言った。

「私は退職しません」

「いや、君、そういうことじゃないんだ。はじめに言った通り、君の置かれている状況、考えていることなどを話して欲しい。実情を把握したうえでないと、会社も方針を立てることができません」

「社員にいちいち聞かないと、方針が立てられないんですか」
「そうじゃないんだ。会社の方針もだが、君の方針だ。君の方針を立てられない。いや、会社の方針かな……」

長い顔に似合わず、せっかちに部長は言った。あまり深く考えないで、思ったことがすぐ口に出るタイプかも知れない。

「私の方針を、会社に立ててもらわなくてもいいんです。私の方針は退職しないということですよ。それでもしゃべれとおっしゃるなら、しゃべってもいいんですが」

「ぜひ、ね。せっかくの機会だから、君の思っていること、感じていることを聞かせてください」

うれしそうに部長が言ったから、私は話し始めた。
「三・一一東日本大地震ありましたよね」

「そういう一般的な話でなく、君の問題をだね」

「いいえ、きわめて私的な、私の心の問題です。あの時の津波はすごかったですね」

部長は仕方ないというように、椅子の背もたれに身体を

預けた。私は続けた。

「原発事故もありましたよね」

部長は私の言葉に、仕方なく、長い顎を上下させた。

「今も巨大地震発生の恐れがあるんでしょう。かなり高い確率で。この間は、私は東京

にいて助かりましたが、首都直下の地震が起きたらどうなりますか。原発だってわかりませんよ。後で、想定外だからと無責任に言えば、あちらさんは済むけど、被害を受けた人はたまらないです。想定

外だろうと何だろうと被害者は被害者。私はねえ、私としてはですね、部長。これが不安で仕方がないんですよ。い

つ巨大地震が起きるか。東京直下で起きるか。もし、再稼働した原発の近くに出張で行

っていた時に、そこで地震が起きたらと思うと不安でしょうがないんですよ」

部長が聞きたいというのだから、と違って勇気を奮い起こして話を続けた。すると部長が言った。

「そりゃ、そうだ。でも一般的に誰でもそうでしょう。君だけの問題ではないでしょう。私もそうですよ。聞きたいのはそういう一般的な話でなくですね」

部長は、私の話になかば同意してなのか、肯きながらも言った。私は念を押すつもりで反論的に言った。

「一般的なじゃないんです。一般的という言葉でごまかしてはいけません。私自身の心の奥底にある不安なんです。

部長さんのように口先だけで不安を言う人もいるかも知れません」

「口先だけ、冗談じゃないよ。君、失礼な」

部長は、マスクで隠れていないところを、やや赤くしていった。めずらしく本気で怒ったようだ。私はすぐに謝った。

「すみません。つい口が滑ってしまいました。すみません。それに加えて今年はコロナでしよう。今のところなんの症状も出ていないようですから、まだ感染してはいないようです。部長も私もマスクしています。が、こういう密室で長い時間一緒にいるとまづいんどしよう。ときどき換気しないと。感染拡大が収まる気配があり

ません。人が動くから感染するのに、ゴー・ツーはそのま

ま。変ですよ。症状が出なくても人に感染させるんですよ。陽性の人全部が隔離されればいいんですが、いまそうやっていません。人が動けば感染する」

「コロナのことなんていいよ、いまさら」

「それがいけないんです。よくありません。私にとつては不安でしょうがないんです。私が無症状なら良いなんて、無責任になれません。大事な人に感染させたら大変でしょう。例えば部長さんに。部長さんはご高齢でしょう」

「ハッ、ハハハ」

部長は口をマスクからはみ出させて笑った。そして続け

た。

「君、心にもないことを言わんでくれ」

「そんなことはありません。うつつしてはいけないと真剣に思っているんです。心底不安なんです。そういう気持ちを分かって欲しいんです」

「分かった。分かった。ありがとう」

部長は投げやりな様子をおらわにして言った。

「地震、原発、コロナ、それに日本学術会議の任命拒否問題でしょう。不安は募る一方です」

私が言うと、部長が言った。

「学術問題。君それはきわめて政治的な問題だ。普通日本人は、政治的課題、問題は避ける。それが安全だ。処世術

のイロハだ」

「いや、遠慮なく言わせていただければ、部長、鈍感ですね。信頼する部長にこんなことを申し上げるのは心苦しいですけど、部長は鈍感。あれはです。予兆』そういう題の本を私は持つています。何もしゃべれなくなります。政治と言いますけどね。そうではありません。まったく政治と無関係でも、吐いた言葉が権力のご機嫌を損ねれば、ひつくくられてしまいます。学者先生だつて、ご本人が思ったことを、思った通りにおっしゃっただけでしよう。これは、怖い。思ったことを言えないのは怖いです。不安です。こんなに世の中に不安が満ちているん

です。だから、だから私は辞めません」

「だから？——だからって君、会社には関係ないことばかりじゃないか。それに君だけの問題だけじゃない。ごくごく一般的な問題だ」

「一般的ということは、一般的に不安が満ちているということです。それは人によって感じ方が違います。なにが起きてても感じない人もいます。同じ出来事でも心を病むところまで追いつめられてしまう人もいます。それに加えてリストラでクビなんていう生活不安が加わったらもう、大変です。不安が満ち、満ちているのに、どうしてさらに生活の不安をつけ加えるんですか。従業員の気持を考えていると

は思えないんです。不安に陥りそうになるのを紛らわせないと生きていけません。部長さんは人生の大先輩ですから、そういう方法にはたけていると思います。そういう方法とはつまり悟った風に、言いかえれば鈍感に、言いかえればごまかして生きて、生きて、生き抜く方法をですね、ご存知だと思えますが」

「黙って聞いていけば、なんか私が、無感覚、鈍感そのもののような人間であるかのようには聞こえる。言わないだけで、私だって不安を感じているんだよ。奥ゆかしいから表に出さないだけだ。君には分からないだろう。君こそ鈍感だよ」

「いいえ違います。部長の方

がおかしい」

私は率直に言った。すると部長は、私に向かって諭すように言った。

「君、君は不安を全部言ったつもりでいるかもしれないが、廃プラスチックの問題、地球温暖化の問題だってある。他にもある、いっぱいある。言葉くらいは知っているだろうが、感じていないんだろう。私のことを鈍感だとか言っているが、君こそ切実に感じていないんだよ。だから、君はそれを言わない。君の方こそ口先だけで、鈍感で、馬鹿だ。勉強して、出直しなさい。さらに言えば、国民が、従業員が不安を感じるのには、指導者が痛みを感じてないからだ。いまある事態を招いたのは指

導者だ。指導者こそ責任を取って辞めるべきだ。君もそう思わないか」

「……」

突然、部長の蝶ネクタイが、次から次へと何匹もの黒い蝶になり、ひらひら、ひらひらと飛び出して部屋の中をぐるぐる飛び回っているような幻覚に襲われた。私は立ち上がった。

蝶を、この部屋から出してはいけない。